

【山崎名誉主宰の俳句】

無為の日々

山崎 聰

さくらたんぽぽ九十一歳男子なり
ほととぎす里のちちは如何におわす
古本に囲まれ暮らす夏の日々
終戦の日山鳩がしきりに鳴いて
大空をちぎれ雲とび秋立つ日
山鳩が朝から鳴いてきょう母の日
満月のあとの数日村の地蔵
秋の虫鳴きはじめさて父母如何に
屈託の行ったり来たりして夜長
ふたつみつ山栗こぼれ無為の日々